

義より設立されたものである事は疑を容れない。其他の學校に至つては皆贅述する迄も無い。四、博物館 關東廳が巨額の建築費を投じたもので専らゴシック東洋風式二階建の石造であつて館内には礦産物、水産物、農産物、殖産、教育等の参考品を陳列して公衆の自由觀覽に供してをる。民國成立の當時此地に逃られた清の故肅親王家より寄贈せられた珠玉、名器及我國の大官の服裝等も亦此中に藏せられ、階下左側には圖書室あり、(目下別館に移轉) 大谷光瑞氏の所藏に係り、閱覽に供せられ、館の後方には動物檻、花園等があつて一般の休憩所となつてをる。

五、其他の場所 黄金山の下は旅順唯一の海水浴場であつて、海水清麗、波靜穩にして、岸には脱衣場を設備し毎年盛夏の候には市民は多く此處に集つて游泳し娛樂場となつてをる。黄金台には又多くの別荘が建てられてあつて外國人の來りて避暑する者多く實に賑やかである。滿鐵經營の旅順大和ホテルは旅客の宿泊する唯一の場所であつて、設備の完善なること大連の大和ホテルに異ならない。此外娛樂機關として舊市街に劇場八島座及活動寫真館等がある。

## 第十編 三大礦産の開發

### 第一章 撫 順 炭 坑

#### 第一節 撫順の沿革

△撫順地方の史的觀察 撫順は奉天の東方二十餘哩、渾河の北岸に位する一都邑であつて、城廓狹窄、人烟稀薄にして清朝初期の軍事史及清末の外交史上の觀察を除けば何等稱すべき史的價値が無い。清の太祖は崛起の當時大に明軍と此地に戦つた。(即ち薩爾滸の戦跡は撫順の東方に在り) 此戦は恰も黃帝が蚩尤と涿鹿に戦ひ、劉邦と項羽とが垓下に戦ひ、劉秀と王莽とが昆陽に戦つた如く雙方にとり興亡の分るゝ所であつた。不幸にして明軍敗北し久しく漢民族の統治の下にあつた支那は漸次に滿洲民族の統御に歸する事となつた。故に此戦は實に滿漢興亡記念の大戦場であつたと云つてもよい。是れより撫順の名は全く聞えなくなつて了つたが、前清の末年露國の滿洲に侵入するに及んで此地の炭礦を採知し、我政府に向つて租借を要求したので、清朝も已むを得ずして遂に之に應じた。然るに其後更に日本に轉讓され、以來今日に至る

まで外國人の掌中に握られてをる。即ち撫順は我國外交史上に一大恥辱を印した土地である。  
 △地理的沿革 撫順城は明代以前には荒野の一村落に過ぎなかつたが、明代に東方の胡人を防禦する爲に撫順所を設けてより瀋陽衛に屬する一軍區となつた。前清の初には承德縣に屬し、光緒二十八年興仁縣を設け、郭省城に附し始めて單獨の政治區域となつたが、同三十三年治を撫順に移し今の名に改稱された。

△炭坑の沿革 渾河を距て、撫順の對岸に千金寨と云ふ土地がある。石炭の産額豊富にして、滿洲著名の大炭坑である。最初高麗が遼東を佔據してゐた時代に採掘せられたもので、爾來歷代士民によつて採掘が續けられて來たが清朝の入關するに及んで撫順の地が祖宗の昭陵、福陵と相通じてをると云ふ理由で採掘を嚴禁し以て山川の靈氣の漏洩を防いだ。是れによつて炭坑は一時採掘停止時代に入つたが光緒二十六年支那商人王承燾、翁壽の二人が奉天將軍に運動し清朝政府に奏上して其の採掘權を獲得した。其後此二人は不和となり東西の兩局に分れ各自獨立して採掘に従事しつゝあつたが、間もなく東局が財政難に陥つて露國道勝銀行の助を借り共同して經營することとなつた爲め翁壽も亦之に加入して華興利煤礦公司を組織した。是れ即ち露國が此炭坑に指を染むるに至つた嚆矢である。其後種々の手續を経て東局は全部露西亞人の手に歸したのでこれより大に發展せんとしつゝあつた。偶々日露戦争が起り、一九〇五年三月の奉天大會戦の後此無盡藏の大炭坑も公然日本軍の爲に占領せられた。日本は四月一日より同炭坑の採掘及舊炭坑の整理に着手し、一九〇七年（明治四十年）七月四日滿鐵會社の成立するや日本政府は此炭坑を其出資財産の一部として滿鐵會社の經營に歸せしめ、以來滿鐵は炭坑の設備、市街の修理等に全力を傾注し遂に寂漠たる一寒村をして人口三萬八千餘の大市街と變せしめたのであつて、其獲得した利益は實に計るべからざるものがある。

第二節 炭坑の概況

△炭坑の面積及其埋藏量 撫順炭坑は大連より二百六十六哩の位置にあり、又蘇家屯を距ること僅に三十一哩にして一時間にして到達出来る。其地勢は海拔約二百七十尺、渾河を挟む大高原である。其礦區は東西十里、南北二哩總面積千八百二十萬坪にして、其炭層の深く厚きことは實に世界無比であり、最も薄き部分も七十八呎、其中位なるものは百五十呎にして、最も厚きは千金寨炭坑の約四百二十六呎である。全坑の埋藏炭量約十億噸であつて、此數によつて其採掘に供せらるる年限を計るに、滿蒙年鑑には「毎日の出炭量を三百六十噸とすれば一年間に十萬九千六百噸の石炭を出すことが出来るから七百七十九年間の採掘に供せられる」と云つて

あり、上田恭輔は「毎日一萬噸の石炭を出し得るとして一年に三百六十萬噸を出すことが出来るから二百七十八年間の採掘に供し得る」と云つてを。之によつて、一九二〇年より三百六十萬噸を以て計算すれば猶二百七十八年間採掘し得るのである。嗚呼無盡蔵の大寶庫を徒らに手を拱いて之を他人の掌中に委するとは何事ぞや、苟も國家を愛し、權利を尊重する思想を有する者ならば、どうして之が爲めに痛心しないであらうか。

△採炭方法 石炭の採掘の方法は初め支那舊式の掘洞法を用ひたが炭層深く厚きが爲め採掘上不便多く、且つ多大の坑木を使用して少量の石炭しか採出出来ないで、日本人は其の不經濟なことを認め、多年の研究に基いて充填法を試みた處、成績頗る良好であつた爲め炭層の薄いものに對しては乃ち掘洞法を用ひ、炭層の厚いものに對しては全部充填法を用ふるることとなつた。即ち石炭を採掘し盡した後は土砂を以て其坑を塞ぎ埋め、更に別に坑を掘るのである。此様にする時には坑木の費用が節約さるゝばかりでなく、工夫の危険をも免るゝことが出来、而も石炭の採取亦頗る便利であるから新法施行以來毎日の採炭量は日を逐ふて増加するに至つた。

△各坑採掘開始年度 日本軍が千金藥炭坑を占領した當時採掘されつゝあつたのは千金藥、楊

柏堡、老虎台の三坑のみで軍事上の需要を充すに過ぎなかつたが、日本が露國より引繼いだ後は大に改良を加へ、坑の數も亦日を逐ふて増加した。今各坑採掘開始の年限を述べれば次の通りである。

(一) 千金藥炭坑

一九〇七年十一月採掘開始

(二) 楊柏堡炭坑

一九〇八年十一月採掘開始

以上の二坑の設備は大體同様にて各深さ九百二十四呎の地點を坑底としてをり、初めて完成した當時は各坑一日の出炭量を二千五百噸と豫定したのであつたが、結果は未だ此の標準に達するに至らない。

(三) 第一露天掘及萬達屋斜坑

一九一五年四月一日採掘開始

(四) 龍 鳳 坑

一九一八年九月採掘開始

(五) 第二露天掘

一九一八年十二月採掘開始

(六) 新 屯 坑

一九二〇年採掘開始

此等の諸坑は毎日合計約九千噸、年額三百二十萬噸の石炭を採出しつゝあるが、滿鐵會社にては將來更に大規模の採炭法を用ひて以て此無限の富を採取せんと計畫中の由である。

第三節 採掘成績  
各坑出炭量

年度	千金寨	大山坑	東郷坑	楊柏堡	老虎臺	萬達屋	古城子	新屯	龍鳳坑	合計
一九一四年	六、七	三、三	五、三	四、七	四、二	一、	一、	一、	一、	二、四七
一九二〇年	六、三	五、七	六、一	四、七	四、六	三、八	三、八	五、	一、	三、二九

△石炭の販賣高 撫順炭坑は滿鐵が其石炭を鐵道、船舶、瓦斯、電氣及各種の工業に用ふる以外に尙滿洲各地の需要及一般船舶の燃料供給に應ずることが出来、又上海、香港、新嘉坡、馬尼拉及日本々國等に輸出せられ、其用途は甚だ廣大である。一九一九年の社用炭百三十六萬一千二百六十噸、滿洲販賣炭百三十九萬一千六百九十五噸、輸出炭七十七萬七百九噸、船舶燃料炭十八萬三千六百四十噸合計三百七十七萬七千三百四噸であつて、今其歷年の石炭販賣成績を次に列挙すれば

年度	賣炭額	收入	支出
一九〇七年	三〇三	一、四八四	九三一
一九一九年	三、七〇七	六二、二〇〇	四七、七七八

(以上は烟臺炭坑の石炭を含む)

上表累年の石炭販賣高を觀るに漸次に増加を示し、一九〇七年より一九一九年迄の凡そ十二年間に約十二倍餘の増加となつてゐる。

尙各種の用途に就いて見るに、滿洲各地の使用高が日を逐ふて増加し、輸出は日を逐ふて減少してゐるが、是れは日本の在滿工業發展の證據と見ることが出来る。之を列記すれば次の通りである。

年度	滿洲各地	輸出	船舶用	合計
一九一四年	一、一四八	一、一四八	三三二	二、四七五
一九二〇年	二、一六七	七四六	二八〇	三、一九四

△石炭の特質 旅順炭は第三紀層に屬し、漆黒の有烟炭であつて、硫磺の含量頗る少く、灰分も亦鮮い。是れが其特色であり、且揮發分に富み瓦斯製造用に供せられ、日本の一等炭と比較され、又機關車及船舶用として適當である。其性質を分析すれば次の通りである。

比重	一・二七六	水分	五・七一七	揮發分	四〇・六三五
骸炭	五三・六四八	灰分	三・八九〇	硫磺	〇・五三〇

第四節 炭坑の設備

△主要機關設備 撫順炭坑は東亞に於ける有名なる大炭坑である。日本の滿洲に於ける活動力は、實に之が其一根源である。故に其炭坑に對する設備は非常に完善なものであつて多量の石炭を採掘することが出来る様になつてゐる。

坑別	各種汽罐			運炭機			各種風扇
	各種捲揚機	曳揚機	クローバー	各種捲揚機	曳揚機	クローバー	
千金寨	八	八	一	二	一	一	二
大山坑	四	六	二	四	三	一	一
東郷坑	六	二	七	二	一	一	一
楊柏堡	四	八	一八	四	三〇	九	一
老虎台	七	七	二	一	二〇	一	一
萬達屋	四	五	六	二	三	一	三
古城子	六	二	一	二	三	一	二
計	八六	五五	七六	二二	一五四	一三	一〇

△選炭装置 各坑の選炭は、先づ旋廻炭車デブラー内に入れて此中より落下した後マークスコングエイヤー篩を以て之を篩ひ大塊、小塊、最小塊及粉末の四種に分け、再び選擇して床下の鐵道貨車内に入れるのである。

右の装置は各種のコレグエイヤー、エレグエーター（昇降機）を用ひ電力を以て之を運轉するのであつて、大山坑及東郷坑には二十乃至三十馬力の電動機が七台、老虎台坑（注砂装置）には十五乃至三十馬力の電動機が三台、萬達屋坑には十五馬力の電動機二台、千金寨坑には、十馬力乃至三十馬力の電動機四台、龍鳳坑には二十五馬力の電動機四台があつて、各炭坑の注砂設備は、楊柏堡にはエキスカパター一台、スチーム、シヨベル三台、塔灣にはエキスカパター一台、スチーム、シヨベル一台、古城子にはスチーム、シヨベル二台、第二古城子にはスチーム、シヨベル三台、エキスカパター五台、永安台にはスチーム、シヨベル二台、劉山にはスチー

ム、シヨベル二台があつて、此等に依つて土砂を採取し、電気機關車八輛、蒸汽機關車十一輛に依つて各注砂場に運搬し、注砂唧筒に依り口径六吋乃至七吋の鐵管内に注入し、坑内必要の箇所を填充するのである。

七八六

△炭車及安全燈 炭車は鐵製にして其重さ七百封度容量千三百封度、軌道は凡そ二吋である。安全燈はサイバル式本田式及ラビー式等を使用し種子油及豆油を燃やすのである。

△炭坑電気鐵道の設備 坑内石炭の搬出及坑内充填用土砂の輸入には輸送機關車を用ひ、各坑間を連絡する電気鐵道は軌條の長さ合計八十二哩三鎖あり、電線路の長さ五十二萬四千四百七十四呎にして、車輛數は電気機關車二十九輛、客車四輛、代用客車五輛、砂運搬車三百三十一輛である。

#### 第五節 烟台炭坑の概況

△炭坑の沿革 烟台炭坑は撫順の支坑である。同地は遼陽の北方烟台驛の東方約十里餘に在つて前清の乾隆年間一客商が龍票八枚の下附を請願し大榆溝より磨箕山の分界までを受領したが、光緒二十六年露國商人が龍票受領の商人に向つて、華家窪、盤道嶺、田家溝、尖山子、磨箕山等の五礦を租借採取した。然るに日露戦争後は日本の據る處となり、野心滿々たる日本人は更

に我商人の採取する尾明山、張家溝、大榆溝の三礦をも亦強行侵佔し、以來烟台の礦區は完全に日本人に掌握せられた。

△炭坑の情況 烟台炭坑は合計十箇處であつて、上記の八箇所の外に尙ほ老虎嶺、華子嶺の二坑があり、東西約十三町、南北約五十町である。日本が最初占據した時諸般の準備をなし、一九一〇年十月一日より始めて營業坑となつた。同礦區は含炭量約二千萬噸、毎日の採炭量約三百噸位であつて、此數字を標準とすれば百八十五年間餘採掘する事が出来、其利益は莫大なるものがある。其炭質は甚だ軟かく、炭塊は脆く碎け易くして、大半は無煙炭であつて、特別の用に供されてゐる。

△採炭成績及設備 烟臺炭坑は撫順炭坑の補助坑たるに過ぎない。故に日本は未だ十分に經營してゐない爲め其で採炭能力は頗る薄弱である。即ち一九一四年には合計九萬六千六百十五噸、翌年は七萬一千二十六噸、一九一六年には九萬一千六百四十五噸、一九一七年には十一萬三千六百七十九噸、一九一八年には十萬六千三百六十八噸、一九一九年には十一萬百六十七噸を出炭したるに過ぎず、各種の設備も亦餘り十分でなく、各種の機關十七臺、各種の捲上機械三臺、曳揚機一台、エンドレス及クリーパー一台、各等唧筒十六臺、各種の旋風機一臺であつて撫順に

七八七

比すれば天地霄壤の差がある。

七八八

## 第二章 本溪湖の煤鐵礦

### 第一節 本溪湖煤鐵の沿革

△地理的名稱 本溪縣は元の本溪湖である。前清の光緒年代以前は遼陽州及鳳凰廳、興京廳に分屬してゐたが、光緒二十八年に至つて、始めて現在の本溪縣に分れたものである。縣城は群山の間僻在してをり、若し石炭と鐵及び安奉線がなかつたならば、全く荒れ果てた一つの鎮に過ぎず、何等發展の餘地がなかつたのである。日露戦には日露兩軍此地に戦ひ、今も猶ほ其遺跡が歴然として残つてをり地理上、歴史上共に羞辱を留めてをる。

△煤鐵公司の沿革 本溪縣は全境域に亘り、山多く礦産物に富んでゐるが本溪湖附近は特別に石炭、鐵の産額に富んでをり、乾隆年間以來同地方の住民は小規模に之を採掘し遼陽一帯に用ひられたものであるが、同治年間に至り同地方の石炭や鐵の需要が著るしく廣大となつた爲め業務も全盛期に入つた。然し光緒年間には海外貿易盛んに興り、鐵の販路は全く外國商人の爲に奪はれた爲め日を逐ふて衰頽に赴いた。是れは我國人の工業能力が幼稚であり、且つ交通不便

の致す所であつて、優勝劣敗は此處にも其一斑が窺はれるのである。

日本は南滿洲に侵入してより以來各地の礦産物に對して多方面より調査を行ひ、殊に作業停止中であつた本溪湖の製鐵業に對しては久しく垂涎措く能はぬものがあつた。炯眼なる大倉喜八郎は日露戦役の當時既に此煤鐵に着眼したもので、一九〇五年十二月關東都督より許可を受けて翌年より支那人と合辦にて經營することを計劃し日支兩當局は數回の交渉を遂げ一九一〇年五月大倉は奉天總督錫良に運動して本溪湖煤鐵公司を設立した。時に資本金二百萬元(大銀元)にして日支双方各其半額を支出したが、其後又廟兒溝の鐵礦を採掘して製鐵業をも兼營するの必要を認め再び交渉をなし、一九一一年十月製鐵部の合辦に調印し、現今の名に改めて、本溪湖中日合辦煤鐵公司と稱し、其資本金を四百萬元より七百萬元に増加した。是れによつて我國の利權は又々一個處を失はれたのである。

### 第二節 公司の營業狀態

△製鐵業初期の計劃 本溪湖煤鐵公司の初歩の計劃は、始めは只銑鐵のみの鑄造をなし、鋼鐵製品は後日機會を見て作ることにしたものであつた。故に先づ百三十噸の爐二基及其他の必需品を備ふることとし、内一基は一九一四年末に始めて完成し一九一五年一月火入式を舉行したが、

七八九